

2019年2月15日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 水信 渉 学生番号 G6D5052016

〈論文題名〉 日本語のプロソディーの聴取と生成に着目した指導方法の研究
ーローパスフィルターとハミングの使用を通してー

〈審査委員〉

主査 外国語学部教授 木村 政康

副査 国際学部教授 近藤 真宣

副査 外国語学部教授 安富 雄平

I. 論文の主旨

本論文の主旨は、授業現場に導入しやすく指導が容易な発音指導方法を提案実践し、その効果を検証することである。

従来の発音指導に関する研究では、大学や大学院などの高等教育機関に所属する音声教育の専門家自らが発音指導を行い、その効果を検証した研究が多かったため、音声教育を専門としない「一般」の日本語教師が発音指導を行った場合においても、同様の効果が得られるかどうかについては、指導者個人の発音指導に関する知識や経験、教育機関における設備や発音指導に費やすことのできる時間が、民間の日本語学校と高等教育機関では大きく異なることから、多くの疑問が残っている。

また、現場の日本語教師からは、「せっかく発音指導をしても、次の授業では発音が元に戻っている。練習しても無駄ではないか。」のような、発音指導そのものについて否定的な意見が見られ、日本語学校において音声教育が行われていない大きな原因となっている。

そのため、日本語学校のように限られた設備や時間、指導者個人の発音指導における専門性の問題から、日本語教師であれば誰が行っても一定の発音指導の効果があげられる発音指導方法を確立することは、日本語学校が抱えている音声教育の問題点を解決することができるため、日本語教育に与える影響は大きい。

これらの経緯から、本研究では、日本語学校に在籍している学習者と現役の日本語教師を対象に、ローパスフィルターとハミングを使用した発音指導を行ったが、発音指導を行ったクラスとそうではないクラスでは、1か月後の学習者の発音に有意差が認められた。

本研究で使用した発音指導方は、音声教育に関する専門知識や発音指導経験を有していない「一般」の日本語教師が行っても一定の効果が認められるよう、指導方法や指導内容を一から見直し、効率化することで、短時間でも効果的に指導できるよう配慮したものである。

また、実践においても、日本語学校の学習者、教師を対象としたため、「生きた」データを収集・分析できたことは、将来の教育現場における、ローパスフィルターとハミングを使用した発音指導方法の実践的な活用を見据えたものであり、日本語教育に対する貢献は大きい。

II. 論文の構成

論文の構成は、以下の通りである。

第1章 はじめに

- 1.1 日本語教育における音声教育の現状 1
- 1.2 日本語教育における発音指導の重要性 2
- 1.3 本研究の意義 5

第2章 発音指導方法に関する先行研究

- 2.1 発音学習用教材 6

2.2	シャドーイング	11
2.3	VTSの基本的概念	13
2.3.1	VT法の基本的概念	14
2.3.2	VT法による指導法	16
2.4	発音指導の目的、本研究が目指す発音	17
2.5	先行研究まとめ	18
第3章 新しい発音指導方法の提案		
3.1	学習者の発音にみられる特徴	21
3.2	プロソディーにおける視覚情報	22
3.3	イントネーションパターンの分類	23
3.4	モデル音声について	24
3.5	発話について	26
3.6	具体的な指導方法の提案	26
第4章 ローパスフィルターとハミングを使用した指導方法の実践		
4.1	インフォーマント	33
4.2	調査内容	38
4.3	母語話者による評価と考察	38
4.3.1	コメント分析 (A、B)	46
4.3.2	4週間後の発音レベル (A、B)	50
4.4	音響学的分析	52
4.5	評価、分析のまとめ	56
第5章 本調査		
5.1	日本語教師に関する要件について	58
5.1.1	日本語教育能力検定	58
5.1.2	日本語教師養成講座	59
5.2	発音指導に関する意識調査	60
5.3	実験調査	63
5.4	分析	68
5.4.1	コメント分析 (SA、SB、SC、SD)	68
5.4.2	4週間後の発音レベル (SA、SB、SC、SD)	72
5.4.3	A、Bとの比較	73
5.5	日本語教師へのアンケート調査	75
第6章 結論と今後の課題		
6.1	各章のまとめ	77
6.2	結論	78
6.3	今後の課題	79

謝辞	81
参考文献	82
巻末資料	
巻末資料 1 読み上げシート	88
巻末資料 2 日本語母語話者による聞き取り調査結果 (SA～SD)	89
巻末資料 3 発音指導用例文一覧	102
巻末資料 4 発音指導用配布資料	103
巻末資料 4.1 母語と日本語の聞き分け用シート	103
巻末資料 4.2 イントネーションパターン導入用シート	104
巻末資料 4.3 会話練習用シート	105
巻末資料 5 アンケート用紙	109
5.1 発音指導に関するアンケート (事前)	106
5.2 発音指導に関するアンケート (事後)	106

Ⅲ 本論文の概要

第 1 章 はじめに

第 1 章は、日本語教育における音声教育の現状、発音指導の重要性、本研究の意義について述べたものである。

音声教育に対する学習者のニーズは高くその必要性が言われている。大学教育機関では、CALL 教室や音声教育に焦点を当てたカリキュラムを組み、発音指導が行われているが、民間の日本語学校において、学習者が「日本語らしい」発音を体系的に学ぶ機会はほとんどない。日本語能力試験や日本留学試験をはじめとする語学試験において、口頭表現能力を測る試験がないこと、「音声教育を行う時間の余裕がない」「発音指導を行いたい、方法がわからない」(戸田：2014)といった技術的な問題も原因となっており、現場での発音指導は、教師個人の技量や裁量に任せられているのが現状である(谷口：1991)。

外国人なまりについては、否定的なステレオタイプを誘発し、話者に対して抱くイメージや印象が悪化することが報告されており(金：2003)、学習者が「日本語らしい」発音を学習・習得することは、仕事上でも日本で生活するうえでも必要なことであると言える。

すでに多くの発音指導に関する実践研究がなされ、その効果が報告されている中で、「せっかく発音指導をしても、次の授業では発音が元に戻っている。練習しても無駄ではないか」(戸田 2009)というような、音声習得の可能性自体に疑問が持つような声があることは、発音指導の効果は、学習者の要因だけではなく、指導する人間の知識や経験が直接影響を及ぼし、指導の進め方次第では、発音指導を行っても全く効果がないことを意味している。

そのため、本研究では、日本語教師であれば誰が行っても効果がある方法を確立し、また、異なる音韻体系を母語に持つ学習者に何を優先的に指導すべきなのか、発音指導における指導内容を見直し、学習者の発音練習時における負担を軽減しながら指導を行い、その効果を検証することで日本語教育に貢献することを目的とする。

第2章 発音指導方法に関する先行研究

第2章は、2000年以降に出版された発音指導用教材を概観し、発音指導方法の傾向について述べたものである。

多くの発音指導用教材では、モデル音声以外にアクセント記号やイントネーションカーブなど、発音に関する視覚的な情報が提供されている。また、これらの教材では、シャドーイングを指導理論として取り入れ、指導が行われている。また、一部の教材では、手を一緒に動かしながら発話することでリズムを考えさせたり、併記されているピッチ・カーブの高低を指でなぞりながら発話をさせたりというようなVT法における体の動きも利用している教材も見られた。

これらの教材には、教師向けの授業の進め方に関する案内や指導書なども付属しており、その教材の目標が明示されている。しかし、教材の案内や指導書が付属していても、「発音指導方法がわからない」や「せっかく発音指導をしても、次の授業では発音が元に戻っている。練習しても無駄ではないか」などの声が出てくる原因は、教師の発音指導に対する認識が甘く、その指導方法がうまく実践できていないことにあると思われる。また、教材によっては、提示する情報量が多く、指導する側（教師）にとっても指導される側（学習者）にとっても負担が大きいことも、発音指導の効果に影響していることが推測される。

音声は学習者の母語の影響が最も出やすいといわれていることから、他の学習項目と比べ、短期間での劇的な改善は期待できない。一度の指導ですべての発音矯正を行うのではなく、段階的な発音指導を行うことで、教師にとっても学習者にとっても達成感が得られるようにすることが重要であると思われる。そのためには、指導する項目の優先順位を明確にし、学習者に「何を」、「どのように」指導していくのかを把握する必要がある。

第3章 新しい発音指導方法の考察

第3章は、ローパスフィルターとハミングを使用した発音指導について述べたものである。

学習者の発話を分析した結果、単音の誤りというより、アクセントやリズム、イントネーションなどのプロソディーに関する誤りが多いことが判明した。木村（2002）は、プロソディーが、各言語特有の「～語らしさ」を担い、これらの習得を優先させれば、単音の指導矯正も容易になると述べている。また、川口（2005）は、発音に「日

本語らしさ」が感じられれば、単音の間違いがあっても、母語話者にとって気にならなくなるといふ報告をしており、発音指導では、まず、プロソディーのような大きい単位から個別の音のような小さい単位への学習を進めた方が、学習者にとっても教師にとっても認識しやすいと考える。

しかし、第2章で概観した教材の中には、プロソディーではなく、個別の音の指導に関してのみ言及しているものや、プロソディーについて言及されているものであっても、一度に提示する情報量が多く、限られた時間と教師の音声教育に対する知識や経験次第では、これらの教材を用いて発音指導を行っても効果が得られない可能性が大きい。

そのため、本論文では、従来の発音指導で使用されていたイントネーションパターンやモデル音声、発話方法などを見直し、プロソディーの聴取と生成に特化した指導方法を提案する。

従来の発音指導方法で広く行われている、目標言語によるモデル音声の聴取と生成による指導では、意識がモデル音声の意味に向いてしまい、結果的にプロソディーへの注意が疎かになってしまう可能性が高い。モデル音声と発話時の意味情報を取り除いたローパスフィルターを通過させた音声の聴取とハミングによる発話を行うことで、学習者及び教師の意識を日本語のプロソディーに自然に向けさせることができると考える。

第4章 ローパスフィルターとハミングを使用した指導方法の実践

第4章は、第3章で考案したローパスフィルターとハミングを使用した発音指導を行い、その効果を検証すると述べたものである。

まずは、発音指導時に日本語によるモデル音声の聴取、発話を行わなくとも、発音指導の効果があることを証明する必要がある。そのため、民間の日本語学校に在籍している31名の初級学習者に対し、1回15分程度、週2回の発音指導を4週間行った。4週間の最初と最後に録音した学習者の発話を3名の日本語母語話者に聞いてもらい、発音が改善されたかどうか、インタビュー調査により評価した。

結果は、発音指導を受けた17名と発音指導を受けてない14名には、1か月後の発音に有意差が認められた。ローパス音のみによるモデル音声の提示、発話をハミング中心に行ったことで、学習者が注意を向けるべき項目が必然的にプロソディーに絞られたため、プロソディーの違いに気が付くようになったと考えられる。発音改善に関する母語話者の評価の多くが、プロソディーの改善に関するコメントだったことから、ローパスフィルターとハミングを使用した発音指導はプロソディーの改善に効果的であるといえる。従来の発音指導とは異なった方法で発音練習を行ったが、発音指導方法における一つの選択肢として、十分に効果が得られたと言える。

第5章 本調査

第5章は、音声教育を専門としない「一般」の教師が行ったローパスフィルターとハミングを使用した発音指導の結果について述べたものである。

ローパスフィルターとハミングを使用した発音指導が、高等教育機関のような設備やカリキュラム、また、指導する教師の音声教育に対する知識や実際の指導経験を必要とするのであれば、従来の研究結果と相違ない。本論文では、日本語教師であれば誰が行っても効果がある方法を確立し、日本語教育に貢献することを目的としているため、「一般」の日本語教師における指導結果は、本論文の正当性を裏付ける重要な要素となる。

そこで、初級から中級の4クラス、対象人数は68名を対象に、民間の日本語学校に勤務している日本語教師4名がローパス音とハミングを使用した発音指導を行い、第4章と同様の指導方法を用い検証を行った。事前の母語話者による発音レベル評価においてクラス間における差は認められなかった。発音指導の手順は、筆者が事前に行った内容に沿うものとし、ローパス音とハミングを使用した発音指導方法への理解を深めるため、日本語教師4名に対し、1時間程度の研修を行った。

4週間の発音指導後、再度調査文を録音し、母語話者3名にインタビュー調査を行ったが、筆者が指導を行った時と同様に、発音が改善されたというコメントが多くみられた。このことからローパスフィルターとハミングを使用した発音指導は、1時間程度の研修を受けた教師でも実践が可能であり、実用性が高いことが判明した。

第6章 まとめ

第6章は、本稿のまとめについて述べたものである。

発音指導の効果は、指導する教師の知識や経験によるところが大きかったが、ローパスフィルターとハミングを使用した発音指導では、発音指導に対して不安を抱えている教師や指導経験がない教師でも効果が得られることが判明した。ローパス音による音声提示、ハミングによる発話を行うことで、モデル音声と発話から意味に関する情報が排除され、教師、学習者ともに「日本語らしい」プロソディーに注意を向けることが容易となった。

しかし、今回の指導方法は、音声教育における初期の段階では有効性が認められたが、負荷が少なかったこともあり、ある程度発音レベルが高い学習者にはあまり効果が認められなかった。今後は、4週間の短い指導期間ではなく、長期的な指導を行い、より負荷の多い発音練習につなげていく必要がある。また、学習者が自律的に発音学習を行っていけるように教材を開発していくことも今後の課題である。

参考文献

参考用例

謝辞

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、2002年3月、中央学院大学法学部を卒業後、2003年10月ドイツライプツィヒ大学文学部 DaF(外国語としてのドイツ語)を経て、2014年4月本学大学院言語教育研究科博士前期課程日本語教育学専攻に入学、2016年3月に修了、同年4月博士後期課程に入学、現在に至っている。修了に必要な単位10単位は既に取得済みであり、外国語検定試験にも合格している。論文提出時の業績は、中間発表会および『拓殖大学言語教育研究』、日本語教育学会、日本言調聴覚論学会などの学会発表など計10本となる。博士論文完成発表会は、2018年9月22日に実施され、2018年9月28日の言語教育研究科委員会で論文受理が承認されている。博士論文は2018年11月9日に提出されている。審査委員による論文審査は、2019年1月25日拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果、全員一致で合格であった。最終試験(口述試験)は、2019年1月28日に実施され、審議の結果「合格」と判定した。

1. 研究テーマの適切性・妥当性について

本論は、言語(日本語)教育における音声指導の出発点はプロソディーであると主張し、また、時間を要さず簡単な訓練のみでプロソディーを学習者に教授できる指導法を確立させること、具体的な指導テクニックとしてローパスフィルター音を用いることにより学習者の正しい聴取・生成の定着が早まる指導法の開発をテーマにしており、適切、且つ妥当であると思われる。

2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

本研究を行うに当たり、国立国会図書館、東京外国語大学附属図書館などに通い、多くの貴重な資料を丹念に収集している。また、日本語教育学会、日本語教育方法研究会、日本音声研究会などの学会、学会主催の研究会に参加し、早稲田大学木下直子准教授、日本大学田川恭識講師、明治大学柳澤絵美特任准教授、国際交流基金日本語国際センター磯村一弘専任講師から助言を仰ぐなど、多くの音声指導に関する情報を得て研究を進めたのは、適切、且つ妥当である。

3. 研究方法の適切性・妥当性について

VT法、シャドウイング、プロソディグラフなどの音声指導法の長所、短所を検証するとともに、ローパス音を用いた発音指導を行い、その結果をネイティブチェックし発

音評価している。並行して音声分析ソフトによる音声データの解析も行い、人間の聴覚に頼るネイティブチェックを音響学的に再評価した研究方法は、適切、且つ妥当であると判断する。

4. 論旨の妥当性

日本語教育、外国語教育、聴覚言語障害教育、音響音声学の観点から、音声指導法を考察し、長期の指導者研修を必要としない迅速で即効性のある音声指導法を確立するという論旨は、妥当であると判断する。

5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

文字表記、調査の実態、詳細な指導方法・手順、学習者のアンケートに関して精細な説明が少々不足していること、参考文献などにやや不備が見られたことが指摘できるが、これらは論文自体の内容や評価を損なうものではないため、論文の最終提出までに加筆・修正することを求めた結果、校正されたものと認めた。

6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

本論文の独自性は以下の通りである。

- ① 日本語学習者の自宅学習をサポートする教材を視野に入れ調査、発音指導を行った。
- ② ローパス音を作成できるフリー編集ソフトを活用し、プロソディー聴取に役立つプログラムの開発を試みた。
- ③ VT法の「身体リズム運動」で用いられる6つイントネーション指導パターンを5つに簡略化して、学習者の負担を軽減した。
- ④ 修士論文のテーマでもあった「ハミング」によるプロソディー指導法を、ローパス音と「身体リズム運動」を併用することでその指導効果を高めた。

筆者は、大学院修士課程時代から日本語教師として実績をつんでいる。日本語インターナショナル・スクールオブビジネス、青山国際教育学院、東京外国語大学留学生日本語教育センターなどの教授歴を経て、現在は、浅草国際学院にて教務主任を務めている。2003年10月～2008年3月までライプツィヒ大学文学部に留学し、第2外国語としてのドイツ語を学んだ。留学時代に経験した語学学習の困難さ、特に発音習得の難しさを痛感している。その経験を生かすべく音声指導法の研究に専念すると同時に、日本語の教授だけでなく、自己の研究成果を学校の教育方針にどのように取り入れるのかを視野に入れた日本語教育に対する姿勢は、教育者、研究者として十分な資質と実績を備えており、今後の日本

語教育、特に音声教育の分野で大いに貢献していくものと考える。

このような点から当委員会は、水信渉氏が今後、言語教育の場で実践的な教育者、研究者として大いに活躍するものと期待している。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重、且つ厳正な審査の結果、総合的に判断し、委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。